

ある少数集団についての一考察

——キツネモチ迷信現象の社会心理学的アプローチ——

野 村 昭

§ 1. その問題性

農村地帯には、今なお数多くの迷信が往行し、農民達の行動の規範ともなつてその生活を規制し、拘束しているようであるが、山陰地方——殊に出雲・隠岐地方——にもキツネモチ迷信なる現象が存在している。これは全国に広くゆき亘つているツキモノモチの一種で、憑依現象として由来、民俗学上の対象に取上げられて来たものである。

キツネツキは単なる個人的憑依現象に止まらず、家筋 (Possessed families) に於て理解せられている。

例えば、一つのモデルを述べれば A (ツキモノ筋——これを「黒」と称している)、B (一般の人——これを「白」と称す) 2家が存在したとするならば、B 家の家族員の誰かが原因不明の病気に悩まされたり、奇異な行動をとつたりした場合、それは A 家のキツネが憑いているからだ、或は A 家が B 家をのろつているからだ、などと信ぜられて居り、A 家はキツネを飼育、操縦するものとして理解せられているのである。そして之等を媒介するもの一つに祈禱師がある。

ここでは「ツカレルもの」「ツカセルもの」及びその両者の間に「介在するもの」が問題となり、その関係性に於てキツネモチ現象 (憑依現象) が顕現しているのであつて、既に社会的緊張関係を内包しているのを見る。「白」と「黒」とは差別して取扱われ、その両者の間には常にこの様な緊張関係が潜在しているのであるが、時に顕化して古来、幾多の大きな社会問題、人権侵害問題、村八分事件等を惹起するまでに至つている (5)。しかも現在に於てもその実害は跡をたゞず、幾度か繰返されて来た迷信撲滅運動も成功せず、松江法務局の人権問題受理件数に於ても、むしろ増加の傾向を辿つて居り (12)、その家筋も増加の方向を示している (6)。このことは一体何を物語るものであろうか。

現代のマス・コミュニケーションの媒体 (Mass-Communication-media) の発達は、都市と農村の文化的水準の懸隔を急速に埋めつゝある。もしもキツネモチ現象が、単に憑依現象の段階に止まつているとするならば、それは、文化的水準の向上、浸透に依て減少傾向を辿るだろうし、現に全国各地方に於ても迷信は減少しつゝあることが報ぜられている (6)。科学的知識の豊富さは、その迷信の脆弱性を露呈し、無意味な信仰の基盤を崩し、それに伴つて社会的緊張関係も解消へと趨くであろう。もしもこの仮定が正しいとするならば、島根県下に於てもキツネモチについて騒ぐ必要は少い。迷信撲滅運動は成功するだろうし、更には時代の推移を待てばよいのである。けれど事實はむしろ逆傾向にある。とすればそこには当然他の要因 (factors) の介入があるのではなからうかと思われる。ではキツネモチ現象は一体何と理解され、何を基盤として支えられているのか、どの様にその意味が転化したのか。——小論はこの様な視点に立ちキツネモチ現象の現在の意味を究明し、その機制 (mechanism) 分析に手懸りを

求めようとする一つの社会心理学的アプローチである。

§ 2. 調 査

先づ、今日流布されているキツネモチ現象とはいかなることについて云われているのか、その今日の意味を知る為に、調査に依てその実態報告をしてもらった。

〔調査対象〕 島根大学学生

その他の島根県下の学生・生徒

島根県下の勤労青年

〔調査日時〕 1954年4月～1956年1月

〔調査地域〕 島根県下（美濃郡を除く）

〔調査方法〕 無記名自由記述にて、知れる限り幾つでも具体例を挙げてキツネモチの実態を報告してもらった。県下の各青年に対しては、学生が帰省の際にそれらの青年達に記入しても

Tab.1 調査対象（人数）

地 域 対 象		市 部							郡 部								計					
		出雲地方				石見地方			出雲地方				石見地方									
		安来	松江	平田	出雲	大田	江津	浜田	益田	能義	八束	簸川	大原	飯石	仁多	瀬原		那賀	邑智	鹿足	美濃	隠岐
島大生	♂	4	5	2	6	3	3	1	1	0	4	4	4	1	2	2	1	1	0	0	2	46
	♀	2	4	1	3	2	1	0	0	1	0	6	2	3	0	1	0	4	1	0	0	31
他の青年	♂	0	11	2	10	3	0	3	7	0	8	10	4	7	0	2	1	1	0	0	1	70
	♀	3	7	2	4	0	0	4	3	0	8	2	4	1	0	2	0	3	1	0	8	52
計		9	27	7	23	8	4	8	11	1	20	22	14	12	2	7	2	9	2	0	11	199

○ 年令（14才～25才）平均年令19才6ヶ月

○ 勤労青年の職業は、農業、教員、会社員、家事手伝、洋裁、工員、左官等多種に亘る

らつたもので、依て、この調査全体は或特定地域を意図的・集中的（intensive）にねらつたものではなく、全県下に広汎に行亘っているものである。（Tab.1）尙、質問は次の四項目について行なつた。

◎「キツネモチ」ということについて、あなたのかんがえを聞かせて下さい。

- i) 「キツネモチ」ということを知っていますか。* (i) よく知っている。 (ii) うすうす聞いているが、それほどは知らない。 (iii) 全然知らない。
- ii) 「キツネモチ」を信じますか、またその理由は、どうしてですか。 (i) 本当に信ずる。（積極的肯定） (ii) 信じたい気持ちになる。（消極的肯定） (iii) 信じてもないし、不信でもない。（肯、否何れでもなし） (iv) 信ずる気持にはならない。（消極的否定） (v) 全然信じない。（積極的否定）（及び各その理由—自由記述）
- iii) どんなことについて云われているのか。あなたの知っている限り教えて下さい。（具体的に）
- iv) 「キツネモチ」について、これからどうしたらよいでしょうか。その対策をきかせて下さい。

〔註〕 ※ これは、調査用紙の不備の為、島大生以外の調査者のみについて質問したものである。

これらの質問はキツネモチの実態と、それに対する青年の態度から、その今日的な意味を探索しようとして考えられたものである。

〔調査結果〕

〔A〕その実態

質問 (iii) に報告せられた事例を問題発生事態に應じて大別すれば、Tab. 2 に示された如く、五項目に亘っている。そして、そこに述べられた各事例の頻数は、必ずしも絶対的に、そのキツネモチ迷信に於ける事態の重要さ、及び出現頻度を物語るものではないが、※その傾向を伺うことは出来るだろうし、また彼等のキツネモチに対する今日の認識内容を示す傾向としても意味があるだろう。以下にその数例を挙げておく。

Tab2. キツネモチ現象の事例別累計

項	目	事例数
1	精神異常, 奇異行動, 不可思議現象等	63
2	動物の実体的存在	8
3	婚姻, 縁組, 家筋, 取引等	67
4	日常交際, 日常生活諸事象, パーソナリティ等	34
5	新興階級, 経済力等	26
計		198

○ 報告者, 124名

○ 之は無報告, 不知や同一人が2つ以上の事例を報告しているので, 人数と事例数とは必ずしも一致しない。

a) 精神異常, 奇異な行動, 原因不明の疾病・死亡, 身体的不具者の存在等について云われる場合。

1. 病気が中々快癒しなかつたり, 家人が変な振舞をしたり, 時々連続して不幸なことが (例えばケガや死亡) が起つたりする様な時, キツネがついたという。(八東郡, 学生)
2. 高い熱病にうなされ, うわごとを云うと, 傍にいた人が「どこから来たか」と尋ねる。すると、「どこそこへ帰りたい」とか「どこから来た」とか云うことを云い, これはキツネがのり移つたのだと云う。(八東郡, 農業)
3. 或娘が病気で寝ていて急に起き上り, 2米程の垣根をとびこし, そこに倒れて人事不省になつた。これは他人のキツネがうつつたのだ, と云われる。(出雲市, 学生)
4. キツネモチの人は, 夜頃, 自分でコンコンと云うそうだ。(益田市, 学生)
5. 例えば, 油揚げをもつて山道を歩いていたら, 自分でも知らない中に方向の違う方に歩いていたら, みたいな場合, キツネモチと云われる。(江津市, 学生)
6. 結婚後, 三日許りした花嫁がいなくなり, 部落中大さわぎとなる。全員でさがして二日目の夕方, 男でも登り得ない様な崖の上に, 一人下をボンヤリ見て笑つていた。人々は云う。「あれはキツネモチじゃ」とか(邑智郡, 学生)
7. キツネモチの人にうらまれると, そのキツネがついて半狂人の様な行動をする。そして祈禱に依てまたケロリと直る。(邇摩郡, 運送業)
8. キツネがつくと目の色が変わるとか, その人はアブラゲを要求するとか, 獣のなき声をするとかいふ。(浜田市, 学生)
9. 或家庭の子供が急死したとか, その家庭に身体不具者がいるとかに対して, その家庭はキツネモチと称する。(大田市, 学生)

〔註〕 ※ と云うのは調査対象が確実なサンプリング(Sampling)に基いているわけでもなく, また彼等の自由記述にて提出された結果が, 完全に知れる限りを記載したとの確証は期し難いからである。

等。こゝには①ツカレた者、及びその家がキツネモチと云われる場合と、②ツカセた者、及びその家がキツネモチと云われる場合とがあり、後者は、社会関係を暗示している。

b) 動物がその家に住むことについて云われる場合。

1. キツネモチの家には、キツネが76匹※(定員)住んでいて、繁殖力が大きい為、新しく他家と縁組をすると、そこに又76匹住むことが容易であるそうだ。(安来市, 学生)
2. 「白」の家ではキツネが入らない為だ、と云つて犬を飼つたりしている家がある。これは老人に多い。(簸川郡, 学生)
3. キツネモチの家の下には、イタチの様な恰好をしたキツネがいたらしい。そのキツネに使いをさせたものらしい。(大原郡, 無職)
4. キツネモチの人が昼寝をしているのを見たら傍にキツネがついていたといわれる。(松江市, 学生)

等。ツキモノの実体的な一説である。

c) 家筋, 家柄, 土地売買, 婚姻・縁組関係について云われる場合。

1. 田を買えば田についてくる。結婚すれば、親縁者皆キツネモチになる。(安来市, 学生)
2. キツネモチの家を買つた為に、キツネモチになつたと云われることもある。(大原郡, 学生)
3. 結婚の話が出ると筋がいゝ、悪いが問題になる。(簸川郡, 学生)
4. 縁談の際には真先にキツネモチか、否かを調べる。(大原郡, 無職)
5. 結婚の場合に、相手の家庭がキツネモチと云われる時は、成立が難かしい。強いてそれを成立させれば、親類間の交際が出来なくなつたり、父母、兄弟の縁を切られる場合が多い。(簸川郡, 会社員)
6. 結婚の時には、一般に「つる」(系列)といわれるものがあり、その全じ「つる」の家の者とは結婚出来るが、「つる」が異なれば結婚出来ない。特に一つの「つる」をキツネモチと云い、これとは結婚出来ない。(簸川郡, 学生)
7. 血統的に二つのいゝ家筋と悪い家筋とがあつて、その悪い血が流れているものをキツネモチの家系といゝ、婚姻関係を結んだ場合にはいゝものが悪くなつて永久に良くならないと考えられている。(飯石郡, 学生)

等。個人的な憑依現象と云うよりも家筋に附随したものと考えられ、それが結婚、取引等に顕現すると見られる。

d) 日常交際, 事件, 其の他日常生活に於ける諸人間関係, それらの人々の人格(Personality)等について云われる場合、

1. これは概して、近所附合の悪い家とか、社会の慣習にそぐわない家等についていわれている様に思う。(松江市, 学生)
2. あの家はキツネがいるから交際すればその人もキツネモチになると云つて交際しない。(安来市, 学生)
3. 慾深であつたり、非外交的である家等に、キツネが養つてであると云われる。(出雲市, 学生)
4. キツネモチと云われるものは、他人の行動に対して「のろう」とでもいうか、或一種の変つた見方をする人に対して云われる。(出雲市, 学生)
5. 村(区)が、キツネモチとそうでないのとはつきり2つに分かれていて選挙、日常交際、結婚等に線が引かれている。経済的、生活的に何等差異が見うけられないが……。 (簸川郡, 学生)
6. 普段は愛想がよくても、気嫌が悪くなると(しやくにさわると)、非常に怒る。そして邪心を起して他人に付き歩く。(簸川郡, 会社員)
7. キツネモチの人を怒らせたり、又恨みを買う様なことをすると、うらみをうけた人はつきまとわれて、キツネが離れるまで原因不明の病気になる苦しむ。(平田市, 針灸業)

[註] ※ 速水氏の本には75匹とある。

8. キツネモチの者が他の家に何か品物をやつて、あとで惜しい惜しいと云っていると、それをキツネが聞いて、やつた人の処へとんで行き、そのものをこつそりと取返すといわれている。(大原郡, 学生)
9. キツネモチの人と喧嘩すると、その人にキツネがサバる(つく)と云う。(八東郡, 事務員)
10. 盗難があつた時など、キツネモチと云われる家に嫌疑がかけられる。(大原郡, 学生)

等。こゝには、日常生活の中に持込まれた差別意識、差別待遇、偏見、各人のパーソナリテイの反映等が見受けられる。そして村落に於ける社会構成・社会関係が之等の問題の基盤となることを思わせる。

e) 新興階級, 経済的強力さ等について云われる場合。

1. 或家が家運が好転して金がたまると、他の家がこれを羨んで、悪い評判をたてる(大原郡, 学生)
2. 豪族の家にはキツネがいて、それがどこからか金を持つてくるといつて、土地の人民が嫌つたというように端を発しているようだ。(大原郡, 学生)
3. キツネモチの家はキツネの行動如何に依つて、家が繁栄したり、衰頹したりする。(八東郡, 事務員)
4. 商売が不振になつたりすると、あそこの家がキツネモチだから、あれがうつつているというようなことがある。(出雲市, 学生)
5. 特に経済的貧困から急激な財産家になつたような場合、周囲から共通した「ねたみ」の中心となり、特異な眼で見られる。(簸川郡, 教員)
6. 或家が商売上景気がよい時などに、「あそこの家は私のところを憎んでいけない、あそこはキツネモチだから……」という。(簸川郡, 学生)
7. キツネモチとは、「つる」の本家に当る家が、以前困つていた時、キツネが出て来て手伝い、家が富んだということからそのように云われる。(簸川郡, 学生)
8. 或事情から或家が急に金持になつたり、また、幸福になつたりすると、周囲のものがこれをねたみ、キツネの霊が家に入つたのだと云つてその家と交際しなくなる。(江津市, 学生)
9. 幕末に職業をかえ、薬用人蔘を栽培し、急に金儲けをして世間のねたみが金儲けをした人達にかゝり、キツネモチになつたらしい。(八東郡, 学生)
10. 成上り者、急に家持ちになつた者には、キツネが金をくわえて来たと考えられたものと思われる。(簸川郡, 学生)

等。こゝには現実的な勢力比・経済力の転換や変動と、歴史的・伝統的なそれとが混在して考えられている。が、その正否はこゝでは問題としない。唯、その遺産(servives)がどの様に人々に受継がれ、どの様に現実に作用しているかを見れば充分だからである。

以上の様に之等の報告せられた data に基いて、現在キツネモチ現象といわれている各事例を大別して来たが、更にこれを類別して Fig. 1. のようにまとめて見た。勿論その「問題性」

Fig. 1. 実態類別

キツネモチ現象	{	憑依現象 (信仰, 畏怖, 不可思議の對象として)	{	1. 精神異常, 奇異行動, 不可思議現象等に関する事象
		社会現象 (人間関係—人間行動を律するものとして)		2. 動物の実体的存在に関する事象
				3. 婚姻, 縁組, 取引等に関する事象
				4. 日常交際, 日常生活等に関する事象
				5. 新興階級, 経済的強力さ等に関する事象

に於ても考察した様に、また、その各事例に於ても示される様に、憑依現象も単なる憑依に止まらず社会関係を内包するものであるし、社会現象はまた、憑依性を媒介として出現しているのだから、その類別に明確な一線を引いたり、全く異種の現象としてその関係性を抹殺して考え

ることは、もとより出来ないが、広汎な事象に亘つて謂われているキツネモチ現象を分析する記述的段階として、また、キツネモチ現象の今日的な意味、そのメカニズムを考究する手懸りとして、その報告に示された各力点に応じて類化したものである。

〔B〕青年の態度

上に実態として報告された結果は、全時に青年のキツネモチ現象の認識内容の傾向を語るものとして一つの参考になると云えよう。が、こゝでは質問 (i)「知悉度」(acquaintance), (ii)「信心度」* (belief), (iv)「その対策」の三つの観点の関連に於て、青年の態度の分析をして見よう。

Tab.3. 地域別の知悉度

地域 知悉度	安 来	松 江	平 田	出 雲	大 田	浜 田	益 田	八 東	簸 川	大 原	飯 石	邇 摩	那 賀	昌 智	鹿 足	隠 岐	計
よく知っている	33.3	25.0	0	27.3	33.3	42.9	0	6.7	38.5	71.4	37.5	0	0	0	0	0	23.0
うすうす知っている	66.7	68.7	100	45.4	66.7	42.9	100	86.6	61.5	28.6	50.0	100	100	100	100	66.7	68.1
全然知らない	0	6.3	0	27.3	0	14.2	0	6.7	0	0	12.5	0	0	0	0	33.3	8.9
全 回 答 数	3	16	4	11	3	7	10	15	12	7	8	4	1	3	1	9	114

○ 不明(回答なし)計8を除く、(他に島大生は除く)

○ 数値は%

〔a〕知悉度——全体の概観を知る為に、Tab. 3. に示される様に地域別にその強さを比較して見たが、data が僅少の為に、大凡の傾向を把握するに止まる。即ち、概して石見地方に比して出雲地方の者がよく知悉して居り、この地方のキツネモチ現象の伝播が伺えるが、全時に「全然知らない」と応えた者も出雲地方に多いのも、もしも更に多数の者に調査を施行した場合にもこれが全様の傾向を示す事実が看取されるとするならば、全国の迷信調査時に於ける山陰地方の憑依現象肯定率の意外の低さを示した***(10) 事実と照合して何かそこにキツネ現象に対する態度探究に、一つの手懸りが与えられるかも知れないと思うのだが、これだけの data では何とも結論を急ぐことは出来ない。

〔b〕信心度——Tab. 4. に示された如く、キツネモチ現象に対しての肯定度は非常に低く、しかも我々の被験者にあつてはその肯定は消極的な肯定(信じたい気持になる)が全員を占めている。また地域別に見て行つても肯定は出雲地方にのみ見られるが、勿論比重は否定に偏重している。我々の被験者が田中(2)及び全国調査(7),(8)、に比較して著しく否定が多いのは、被験者に学生が多く介入していることから当然首肯され得ると考えられるが、逆に全国

〔註〕※ これは一応キツネモチ現象に対する肯定(否定)の強さを示すものとして考察して見る。

〔註〕**※ 「犬神・狐などが人に憑くと思いますか」という問に応じて、「つく」と答えた全国肯定率 17.58% に対して、山陰地方肯定率 4.63% という低さ。

Tab.4. キツネモチ現象肯定度（青年）（％）

肯定度	調査者	野村	田中	全国
肯定		3.7	6.5	33.9
肯定でもない否定でもない		9.8	56.0	21.4
否定		86.5	32.5	44.7
被験者総数		184	123	904

- 野村の調査には「肯定」は「積極的」と「消極的」、「否定」も「積極的」と「消極的」を含む
- 田中の調査は「肯定でも否定でもない」は「わからぬ」と「他人に左右される」が入る。尚、その他「無回答」「別の意見」は省いた。（20才～29才）
- 全国調査は「肯定でも否定でもない」は「わからぬ」に当る。（29才以下）

由に依てそれを信じようとしているのか。信でも不信でもない（肯定でも否定でもない）と答えた者と共に、その理由を分析して見たい。

イ) 信じたい気持ちになる理由、

1. よく体験をした人から実例を挙げて聞かされるから。
2. 家族（父母）及び近隣者の話に依つて、その様に思わせられてしまう。
3. 家の周囲で度々あるのでそう思う。等

ロ) 信でも不信でもない理由、

1. 信じている者が多いようで、わからぬ。
2. 信じてはいないのだが、気になる。
3. 母が小さい時に「サバられ」たこと（つくということ）があると話してくれたことがあるから信ずることもいやだが、全然否定出来ない気もする。
4. 信でも不信でもないが、どうすることも出来ない。
5. 信じてはいないのだが、人が云うから困っている。
6. 余りよく知らないから何も云えぬ。
7. あんまり関心をもっていない。
8. はつきり原因が判るまで何とも云えない。等。（下線は筆者）

これ等の理由を通覽するに、大きく三つの傾向が見られる。即ち、

- i) 憑依現象そのものに対しての、不知、無関心、及び科学的知識の欠如等に依る理由。
- ii) 伝達者（信じている人）との接触を通ずることに依る理由。
- iii) 地域社会の人々の全体的な傾向に準拠している理由。

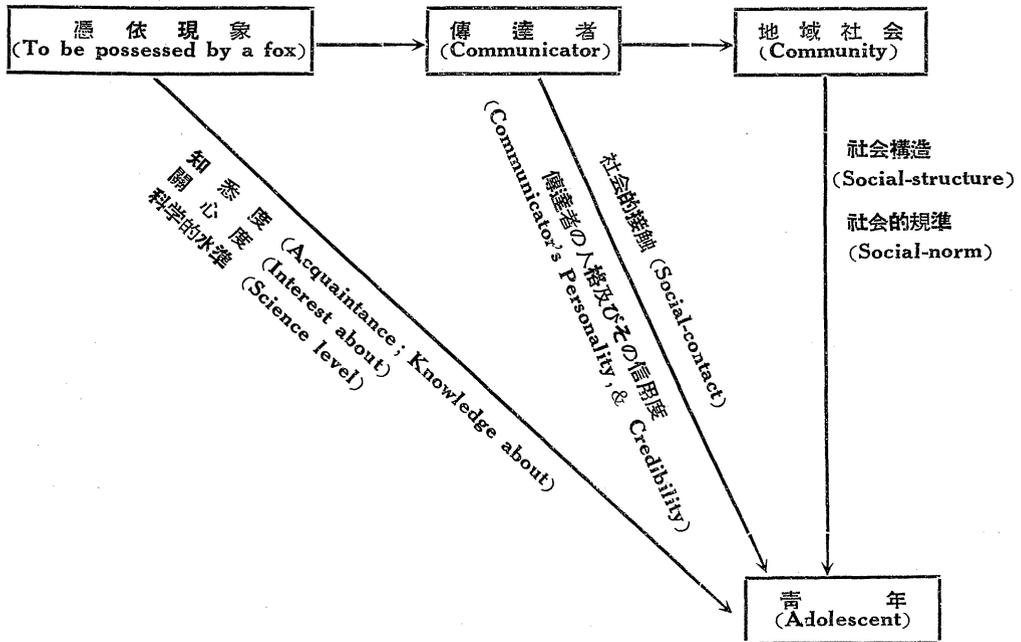
である。これらの事実は何を物語っているものだろうか。おもうにこゝには、現在におけるキツネモチ現象が伝播され、形式されて行く過程や、その実態の基盤が見られるように思う。即

調査の結果も肯定が異例に多すぎる様に考えられる。何れにしても我々の調査はその対象の質的な偏在、量的な僅少の関係上、知悉度そのもの、信心度そのものの頻数には絶対の信を置くことは出来ないと考えられるから今後の研究を期して、今は参考程度に止めることとする。

我々の結果では、積極的に信ずると云うものは皆無だが、消極的肯定は3.7%いる。では彼等はどの様な理

ち、彼等青年が、キツネモチ現象を信じたい気持ちになつたり、否定するまでに至らない態度を持つに至つたのは、こゝに見られる様に単に憑依現象に対する無知、無関心等に由来するに止まらず、そこに社会的条件が介入しているためである。それを更に詳しく見て行くなれば、

Fig.2. キツネモチ現象に対する態度形成過程 (Postulate)



i) 伝達者の存在——これは多くは青年達より年長の人々であり、彼等の身近に近く存在する。彼等を媒介として青年はその態度を左右されているのである。だからこゝではその伝達者と青年との社会的接触が問題となろうし、殊に、伝達者自体のパーソナリティ、伝達者としての信用性 (Credibility) 等がその研究対象となる。

ii) 地域社会の人々の全体傾向——更に、その地域社会の構成員がどの様に考え、どんな行動をとっているかということが青年の態度を規制しているのである。だからこゝではその地域社会の一人の構成員としての青年が問題になろう。その社会がどんな規範を持ち、それがどのように支配されているかと言う社会規準、及びその社会構成が重要な研究課題となる。

以上、三方向より青年の態度を決定する諸要因を見て来たが、しかもこれは各個竝列的に存在するのではなく、キツネモチ現象の実態究明の際にも述べた如く、憑依現象と社会現象との関連性を思うならば、むしろ一連の關係に於て段階的に理解されるべきものと考えられる。今、Postulate としてこれらの過程を図にして示せば Fig.2. のようになろう。矢印は憑依現象の働きかける方向を指す。

以上はキツネモチ現象に対する肯定態度の者についての考究ではあつたが、次に不信の理由を分析して見れば、「別に理由はない」、及び、「無回答」を除いて、

i) 憑依現象そのものについての不信理由……83.8%

1. 実際にそんなことは有り得ない。
2. 非科学的で、根拠がない。
3. 実につまらぬ馬鹿げたことである。
4. はつきりその事実を知らない。
5. 本当にそんなものを見たことはない。等。

ii) 伝達に関する不信理由……6.5%

1. 今日はそんなことを余り聞かない。
2. 昔から言い伝えられてきたのにすぎない。
3. 身近に話を聞いたことがない。等。

iii) 地域社会との関連に於ける理由……9.7%

1. 世論も否定している。
2. 出雲地方だけのことだと思うから。
3. 差別を設ける必要はない。
4. 信じていると、日常生活でクヨクヨしなければならぬから。等。

の三項目に類別出来る。^{*} このことは先の信ずる場合と全様の要因の存在が、やはり彼等の態度形成に参与していることを裏づけるものと云えよう。更に、こゝに見られる青年の不信態度は、その中でも圧倒的に「憑依現象そのもの」に向けられる傾きを持つ。この data では、約80%以上が不信であり、その不信者の中、実に90%が憑依現象に向けて不信の態度を表明しているのである。このことは彼等の不信態度形成の諸要因の働きぐあい (weight) を語るとともに、他面、キツネモチ現象の実態報告に示される彼等の認知内容の多様さ (variety) との懸隔を思い合わせる時、不信 (否定) の態度の表明が、必ずしも「キツネモチ現象の全態」の否定を意味するものではなく、「社会現象としてのキツネモチ」に拘わることの少ないことを思わせる。

(c) キツネモチ現象への対策と知悉度との関係——キツネモチ現象に対して否定的(積極的、消極的を含む)態度をとるものの対策は次の様にまとめられる。

i) 社会的啓蒙運動、活動、教育等を強調するもの

1. 教師・役場の人達が調査を出して、その弊害を訴える。
2. 農村教育の再出発を計り、宗教界の改革を期すことに依て……。
3. 機会を捉えて科学的調査・説明を青年層に話す。
4. 青年団活動を通じてその無根を実証、啓蒙し、レクリエーションを通じて融和をはかる。
5. 新聞・ラジオを通じてその撲滅を衆知徹底させる。等。

ii) 個人的自覚を強調するもの。

1. こんな考えは頭から去るべきだ。
2. 教養を身につけるようにする。
3. 気持のもち方一つにかゝっている。
4. 各人が子孫にこんな話を伝えないようにする。

〔註〕※ 勿論、この類別が充分であるというのではない。例えば、[i]—(4), (5) と [ii]—(1), (3) とは非常に類似していて、僅かに力点の相違が見出されるのみである様に思う。が、こゝで重要なのは、この三点に要約され得ると云う処にある。

5. 各自の信念で確信すればよい。
6. 皆が見ないふりをして、こんなことに耳をかさない。等。

iii) 自然消滅を唱えるもの。

1. 時代と共に自然に消える。
2. 青年が大人になるまでまてばよい。等。

その他、「具体策なし」、「考えたことなし」、「わからぬ」及び「不答」である。* 之等の対策と知悉度との関係を見れば Tab.5 の様になり、総じて、相対的にキツネモチ現象の実態をよく知っている者程、その対策には社会的関連性に着眼して積極的打破を強調し、知らないもの

Tab.5. キツネモチ対策と知悉度との関係（不信と答えたもののみ）（%）

知 悉 度 \ 対 策	社会的啓蒙	個人的自覚	自然消滅	具体策なし	不 答
よく知つてゐる	42.1	21.1	0	10.5	26.3
うすうす知つてゐる	18.5	26.2	6.1	10.8	38.4
全然知らない	11.1	11.1	11.1	0	66.7
計	22.6	23.7	5.4	9.7	38.6

程、不答が多いのは当然だが、自然に放置しても消滅することを唱道する傾向がある。これはキツネモチ現象との距離が近く、接触の多い者程（知悉度の高い者程）、その「社会現象としてのキツネモチ」を、また距離が遠くなり、接触の殆んどない者程（知悉度の低い者程）「憑依現象としてのキツネモチ」を認識し、それに反応しているものといえよう。

この傾向は、次の二つのことを意味しているのではなからうか。即ち、一つは彼等の受とり方を通してのキツネモチ現象の実態を示すdataと見る場合で、それが既に「憑依現象」から「社会現象」に転化・拡張しているのを観る。知悉している者ほど「社会現象」の側面に対策を配慮しているのは、そのことあるを思わせる。他方、前に考察した不信の態度が「憑依現象」により多く向けられていたことと対比して、青年の態度がその対策に於ては、キツネモチ現象をよく知悉している者程、自分が「憑依現象」に否定の態度をとりはしたが、対策としてはむしろ「社会現象」に眼を注がねばならぬという、いわば不信の態度と対策との間に脊離があり、よく知らない者程、その間に一致がある。換言すれば、キツネモチ現象を知っている者程不信の態度をとることと、打破することとは一応別問題と考えて居るのであり、そこにキツネモチ現象の複雑性（憑依現象と社会現象との二重性）を認めていると云える。具体策を示すことの出来なかつた者のいることも、この故かも知れない。それに対して、知らないものは、信じないということが、同時にそれがなくなることであり、キツネモチ現象を単純に（憑依現象とし

(註) * この類別に於て、社会的啓蒙は、必ずしも、根本的解決策を意味するものではない。唯、彼等が対策を樹てるに当つて、社会的視野を含んでいるか否かに依つて決定したのである。

でのみ)捉えている。

§ 3. 考 察

〔A〕 結果の要約, 及びその考察

我々の data は, キツネモチ迷信現象の実態とそれに対する青年の態度の面より, その今日に於ける意味を把握するために追究されたものであるが, その結果は次のようにまとめることが出来るであろう。

i) キツネモチ現象として一般に流布されているものの中には, 大要, 「憑依現象としての」それと, 「社会現象としての」それとの二面が見出され, 之等は相互的な関連に於て顕現する, いわば, キツネモチ現象は二重の意味を担つて来ているのであるし, 既に単なる憑依現象自体に於いてのみ出現するのではなく, 広く社会現象として・人間関係を規制するものとしても流布されているのである。

ii) これに対する青年の態度の分析では態度形成の要因が, Fig. 2. の如く '①それに対する知識や科学性に従つて憑依現象そのものに直接的に向けられているものと, ②憑依現象を媒介するその伝達者 (Communicator) (例えば, 父母, 実際体験者, 古老等)との接触度, その人の信用度, パーソナリティ等に依て決定されるものと, ③その地域社会の圧力によつて社会的規準に近づかむとしてのもの' とに基いていることが見出された。この②③の態度形成要因は, 社会構成, 人間関係を示すもので, 先の大別の「社会現象としての」キツネモチ現象に対応する。

彼等青年はキツネモチ現象に殆んど不信(否定)の態度を表明して居り, しかもその不信は明らかに殆んど憑依現象そのものとしてのそれに向けられて居るのだが, キツネモチがいかなる現象かを知つて居れば知つている者程, 「社会現象」に着眼し, たゞ「憑依現象」への不信を表明するだけが必要しもその対策に拘わるものでないことを報告している。即ち, 「不信」態度は今日では一面的にしか有意味でなく, キツネモチ現象の全貌との間にはズレが存するのである。こゝにキツネモチ現象の現在に於ける変転化, 拡張した形態が見られると同時に, それが示すその二重性が青年をして, その態度の二重性を招来せしめているのがうかがわれるのである。更にキツネモチ現象に対する知悉度に依て, その態度の多面性(よく知つている者程), 一面性(よく知らない者程)が決定されるという問題は, 我々が一度獲得した事象, 事物の概念は, その事象・事物そのもの(その実態)が変化しているにも拘らず, 元のまゝに存置され, 我々のステレオタイプ(stereotype)が形成せられている間の事情を物語つていよう。即ち, それをよく知つているということが, 多くの(量的に), しかも身近の(質的に), 経路(channels)を通つて来た(3)ことを思えば, その事象との接触の頻度, 距離が, 単なる「風のたより」や, 「頭の中に描かれた絵画」(pictures in our heads)(15)との差異を成立せしめ, 決定づけているのが見られる。

キツネモチ迷信現象の現在時点に於ける波及・浸透の実相(その複雑性)が, 以上の様なその実態報告及び態度表明の中に看取出来るのである。

〔B〕 その歴史的考察

元来、ツキモノモチ家筋の出現に関しては①「特殊な職業を持ち、その奉仕する神が他と異つていた家が、その神に依る託宣を効果あらしめる為に特殊化し」「更に仏教の普及などに依てその託宣の威力が減少し、一般と疎遠となつて次第に、邪宗・魔法めいた印象を強くすると共に、かつての靈談だけが誇張されて今日の狐持・犬神・トウビヨウ持などと称せられる家筋が極端に忌み嫌われるようになり、託宣をなけば業とした家々が、信仰の衰えに依て世間から畏敬され不安がられ、迫害される世になり、その秘伝口授の相続をおこたり、自らも恩赦よりは迷惑を感じ、絶縁を願うようになつて現在のように末期現象を呈することとなつたものであろう」(11)(cf. (1))とする説や、②「近世中期以降の封建社会、封建制下の農村の社会経済状態の中」に於て、「彼等(筆者註——キツネモチ家筋といわれた人々——)が」「元祿、享保頃における滔々たる貨幣経済の波に乗つて、農村に移住し、あるいは商業資本家として、あるいは高利貸資本家として活動し、農民の手から土地を奪つて、中間搾取者たる新興地主となり、旧来の農村の階級構成を変動させたことに対して、彼等に土地を奪われた農民達と、従来の指導的立場から蹴落された土豪達の恨みが結集して、迷信という幼稚なイデオロギー(觀念形態、考え)の形をもつて意識上における反撥と排斥とが、彼等を狐持ちという特殊家筋たらしめた」(5)のだとする説(速水) 更には、③ツキモノ筋「黒」の特徴の研究に於て、例えば、一村に「黒」が多い場合にはその家筋の資産的な傾向だけでは調べられないから、土着時期を調べると、「黒」といわれている家は、その土地の草分け時代にそこに定住したものではなく、第二期位に入り込んで来た家が多い。だから先住者を凌駕せんとした者に対しての社会的緊張に依る所産ではなからうか(1)と考える説(石塚)などが考察せられている。

これは、前者が憑依現象の社会的反映を、後二者が社会現象の憑依的反映を見る立場といえよう。我々は data の蒐集に乏しく、未だ、これら歴史的考証に論を加えるまでにいたらないのだが、何れにしても現代に於てはこれが及ばず弊害は甚しく、社会問題を惹起するまでに至つているのであり、家筋出現の当初に於ても既に社会関係の一つの危機様相をはらんでいるのが見出され、例えば「近世においても雲州広瀬領内では狐持の家を根絶すべく、いやしくもその世評のある家は、不意に外から囲つて封鎖し、人馬もろとも一時にこれを焼」却したといわれている(9)。また、松江藩庁も、この迷信の蔓延甚しきを恐れ、これが危害を取除くために、寛永3年8月(1791)に、迷信打破の「狐これ無き儀御触書」を出している(5)。この様に、夙に社会的な弊害を伴い、その弊が認められて来たものであるが、出現段階にあつては、民衆の憑依現象に対する畏怖・逃避、信仰・宗教と；人間関係に於ける憎悪・嫉妬等との結合(未分化状態)に依て招来せられた歪められた人間関係に基くものと考えられるのである。少くとも信仰形態の存在(その心意伝承の基盤)を認めずしてこれらを語ることは出来ないであろう。けれどもこれに対して現代では全様に社会問題とはなつても、これらとは少し趣きを異にしていると思われるのではなからうか。即ち、我々の data に示された処に依れば、少くとも青年達にあつては、信仰態度は殆んど示されず、むしろ形骸化してしまつている。憑依現象としての意味は衰微

し、社会現象として、社会的人間関係を律するものとして、実態化しているのである。これが推論を以てすれば、田中の調査に依ると、概ね年齢が下るに従つて不信の態度を示すものが多く(2)(Tab. 6)、時代の推移と共に憑依現象が形骸化されているのが判る。けれども、極端に云うならば、誰も信じなくても、キツネモチ現象は存在するのであり、現在、猛威をふるつているのである。それは社会現象としての意味を獲得していること、それは伝達者を媒介とし、その地域社会の基準として権威をもつて来て居り、それに依て民衆がその不信の故にも拘らず、大きな影響をうけ、行動を、態度を左右せしめ

られているのを見る。換言すれば、民衆が科学性の貧困に依る非合理主義的な規準 (norm) に従う爲にキツネモチ現象が存置・波及していると云うよりも、むしろ地域社会内の権威主義的な規準に従っているのであり、今やキツネモチ家筋は少数集団 (minority group) と化している。だからこそキツネモチ迷信現象は一向衰微する傾向を示さないのだと考えられる。

〔C〕 社会心理学上の問題点

この事実は何つかの問題点を提起する。

- i) 迷信の撲滅運動が何故成功しないのか。
- ii) 根強い迷信打破には如何なる方策が考えられるか。
- iii) 我々の少数集団に対する態度のステレオタイプの形成、及び偏見が如何に形成されるか
——そのメカニズムの問題——

等である。

キツネモチ現象が、憑依現象としてのそれと社会現象としてのそれとの二面性を持ち、しかも現在の青年達にあつては前者は既に形骸化していることは、今迄に幾度か考察して来たし、多くの論者の認めるところでもある(1),(5),(6),(9)。そしてその持ち家筋は、信仰の形態を借りた社会的圧力の下に存在し、民衆にとつては、も早キツネモチ家筋は少数集団として認知せられているのである。そこでは「キツネがつくか、つかないか」、「それを信ずるか、信じないか」が問題ではなく、「キツネモチにされてしまうこと」、「キツネモチと結婚すること」そのこと自体の中に問題が存する。非科学的・非合理的な世界に支配されていると云うよりも、権威的な世界に支配されている。キツネモチ現象が憑依現象そのもののみであるとするならば知識や科学水準の向上に依て、その非合理性は解消され得るだろう。現に、この現象と距離の遠い者はこの様に思っているが、距離の近い者程その意味の転化を知る。そしてそれは、伝達者(父母、近隣者、古老、等殊に祈禱師にも着目してみたい)を通し、地域社会の力関係を学び、そこに於

Tab.6. 信, 不信態度 (田中) (%)

年齢	肯定	否定	中間
20~29	6.5	32.5	56.0
30~39	14.5	21.7	60.1
40~49	12.8	22.9	59.1
50~59	15.8	18.4	61.9
60~69	22.4	24.5	53.0
70~	21.2	24.2	42.4

Ss 525名

てキツネモチ現象が理解されているのである。その実態の処でも見られたが、更に以下に幾つかの、人々の社会化の過程、その社会的圧力、緊張関係を示唆する例を挙げて見よう。

- ◇ 人々はしつかりと門戸を閉じて開けようとしません。「そんなこと（キツネモチ）ないかも知れないが、親戚のものに縁を切られるとつまらないし」と考えているのです。（畿川郡, K村, 学生19才）
- ◇ キツネモチの調査をする為に中学の先生にお願いしたのですがその時こう云われました。「だんだんと差別はなくなつて来ているのに寝た子を起すな」と。また近所の人々から、こんな調査をし始めた為に白眼視されかけました。こんな考えの人が多いのだから、キツネモチはなくならぬのだと思います。（大原郡, D町, 学生22才）
- ◇ 調査（筆者の依頼）のために奔走しましたが、何でそんなことをするのかと皆が云つてそれに協力してくれませんでした。若い者はそうでもありませんでしたけど……。それにそんなことを大声で話すわけにもゆかないし、ましてキツネモチといわれている友人には、ぼくでも何ぼ何でも、何となくその話題は出しにくいしね。（畿川郡, H村, 農業19才）
- ◇ 「憑きもの現象にもとづく社会的緊張は、現地研究者がわれわれの研究に協力したために家も焼かれると恐れたことや、調査者が自己の不安を強く感じながら調査した事実などの中にも、端的にあらわっている。」（野村氏, (4),）
- ◇ 「キツネモチなどと昔はいゝましたが、もう今は殆んどなくなつていますよ。」と断定的に云つて、早く話題から遠ざかりたい、ふれたくないと云つた態度をとる人。（大原郡, K村）
- ◇ 村一番の大地主の三男坊として生れた連水氏が、「私が狐持ちという言葉をも最初に知つたのは、相当もの心のついた小学校の5,6年の頃であつたでしょう。……（中略）……『やい、狐持ちの子、お前の家は狐持ちぢやないか……。狐持ちの子だから、お前も狐を使つていい成績をとつたんだらう……。』私はぐつと返答に困つてしまいました。……（中略）……『狐持ちの子』という言葉に、その意味がよくわからないながらも、私や私の家に関して、何か大変都合の悪いことを云われたように直感して、私は何んにも云えずに、その場から逃げ帰りました。……（中略）……帰宅すると、さつそく私はこのことに告げました。狐持ちという言葉を開くと、一瞬父は大変困り果てたような様子でしたが、直ぐと持前のかを父んべきな大声で、あたかも私が悪いことでもしたように、私に怒鳴りちらしました。『一体誰だ、その小伴は……どこの子供だ……たあいもないことを云いやがつて……。』この見幕におそれをなした私は直ぐと、父の前から引き退りましたが、なぜか父もそれ以上のせんさくをしようとせず、また狐持ちといふことの説明もしてくれませんでした。」と述べている。（5）等。

これ等は未だ僅少な資料であつて、まだまだその緊張関係様相の全貌を伝えるには充分でないが、その一端は何えよう。

現在キツネモチ現象は、憑依現象と、社会現象との両面を持ち、憑依現象に対する信・不信の態度（信仰態度）は、老人（年長者）になる程未だ積極的な直接的な意味を残存している様ではあるが、若年者程、それは消極的な意味しか持つていない。そしてそれに代るキツネモチ現象は、信仰的色彩の薄められた社会的圧力によつて、その社会の行動・判断・考え方の規範となる傾向を示しているのである。こゝに於て人々にとつて大切なことは、「その世界（現象）についての知識（information）ではなく、他人がそれについて何を考え、いかにそれを評価し、解釈し、それに対してどんな態度をとつているか」（14）が重要な課題となつていのである。彼等はその社会化の過程に於て、その現象が如何に非合理的なものであるかを学ぶよりは、寧ろ人々の態度を学び、権威を感じて来ているのである。だからオルポート（G. W. Allport）が指摘する様に、「少数集団についての知識が増加するに従つて、より正しい所信（beliefs）の構え（set）へ

は導かれるだろうが、その割合では 態度(attitudes)は変化しはしない」(13)。ということが、このキツネモチ現象に対する人々(この場合は青年)の場合にも当はまると考えられるのである。

その事象の知悉度が、それに対する認知態度のステレオタイプ形成の一要因たること、及び、よくそれを知っているにも拘らず、何となく薄気味悪がつたり、偏見を懐いたりするメカニズムがこれらの結果に見られるように思う。

この小論は、キツネモチ迷信現象の今日的意味、その複雑さ、根強さの根源を知る為の社会心理学的アプローチとして記述的段階にあるものであるが、全時にそれがメカニズムの探究にも一つの手懸りが与えられたと考えられる。しかし、資料もまだまだ充分でなく、更なる調査研究、検証に依て、これらの問題の究明・解決が計られねばならないし、それを願っている。

文 献

1. 石塚尊俊：社会的緊張の問題——つきものについて、1956.5. 於中・四国家政学会
2. 田中宥自：狐憑き迷信の一考察(島大卒業論文—中間発表—) 1956.12. unpublished.
3. 野村 昭：職業評価を通じて見た青年の価値観——その形成過程の一考察——, 1956,7. 第20回日本心理学会(於立教大学)発表
4. 野村暢清：「憑きもの」の心理, 小口偉一編『宗教と信仰の心理学』新心理学講座第4巻, Pp.247~57, 1956, 河出書房
5. 速水保孝：つきもの持ち迷信の歴史的考察——狐持ちの家に生れて, 206. Pp. 1953. 柏林書房,
6. 堀 一郎：村落に於ける宗教的緊張, 日本文科学会編『社会的緊張の研究』 Pp.195~208. 1953, 有斐閣
7. 笠松 章：医学と迷信, 迷信調査協議会編『迷信の実態(第4章)』(日本の俗信1), 1949, 技報堂
8. 笠松 章：迷信による殺人鑑定例. 迷信調査協議会編『俗信と迷信(第2章)』(日本の俗信2), 1953. 技報堂
9. 今野圓助：文化遺産と迷信, 迷信調査協議会編『俗信と迷信(第1章)』(日本の俗信2), 1953. 技報堂
10. 今野圓助：靈魂信仰による生活慣習の分布, 迷信調査協議会編『生活慣習と迷信(第4章)』, (日本の俗信3) 1955. 技報堂
11. 柳田国男監修：民俗学辞典, 1951. 東京堂版
12. 読売新聞, 島根版記事, 1956. 11月29日
13. Allport, G. W., : The Nature of Prejudice. 537Pp. 1954. Addison-Wesley Pub. Co.,
14. Festinger, L. & H. H. Kelley : Changing attitudes through social contact, an experimental study of a housing project. 83Pp. 1951. Univ. Michigan.
15. Klineberg, O. : Social Psychology. 750Pp. 1950, New York: Henry Holt Co.,

Social Psychological Approach to a Minority Group—

The 'Kitsune-Mochi', or 'Fox-Possession'. (Possessed Families and Persons)

by AKira, Nomura.

Shimane University

[Problem] : There is a minority group that is called "Kitsune-mochi" in San-in area, the provinces of Japan. The Kitsune-mochi had ever been a phenomenon that a person is possessed by the fox. Now, this phenomenon, however, is changing itself into a possessed family, and then, is interpreted as fact which has much influences upon the interpersonal relations. Thus we may think that the possessed families are a sort of minority group today.

[Purpose] : This research aimed to study the attitude-formation-process towards a minority group through this Kitsune-mochi phenomenon. The subjects used 199 adolescents —students and young labourers.

[Result, & Discussion] : The results lead up to the postulate of Fig. 2. (attitude-formation-process). Fig. 2. indicates the mechanism how factors act upon the attitudes-formation-processes towards a minority group. In Fig. 2., the effects of each factor are indicated by the directions of the arrows. According to Fig. 2., ① the attitudes towards the original phenomenon (to be possessed by the fox) directly, are decided by adolescents' "knowledges about," their "interests about" and their "science-levels." And, ② the attitudes towards the original phenomenon through the communicator are decided by "comtunicator's personality" and "his credibility". Moreover, ③ the attitudes towards the original phenomenon through the community are decided by "the community-structure" and "it's social-norm." These three main factors act upon the attitudes towards the Kitsune-mochi: in the other words, Kitsune-mochi-phenomena mean two phenomena; "to-be-possessed-by-a-fox" phencmenon and "social" phenomenon.

In this data, it is found that most of adolescents' negative attitudes towards the Kitsune-mochi rather directed towards the original phenomenon than towards the communicator and community problems, as if the original phenomenon is all of the Kitsune-mochi. Therefore the negative attitudes towards the Kitsune-mochi do not always mean a disappearance of the Kitsune-mochi: i. e., the more the informations about a minority group increase, the more the attitudes (belief-sets) towards "to-be-possessed-by-a-fox" phenomena modify, but the attitudes towards "social" phenomena do not always modify.

Thus, as egards this point, it may befound that the attitudes (prejudices) towards a minority group ore formed, and are maintained by forces of social phenomena (i. e., as commu nicator and community problems), and that the communication-processes and the soci- alization-processes are more important than the brief-sets on the study of prejudice.